

(報告)「子どもの放射線被ばくの影響と今後の課題
—現在の科学的知見を福島で生かすために—」

1 現状及び問題点

原発事故を含む災害の影響から子どもを守るには、放射線リスクに関する科学的知見と防護の考え方をベースに、一般市民と専門家間で双方向性コミュニケーションを行いながら、被災地の復興を推進する方策を提言する必要がある。そこで、ベースとして共有すべき知見を「報告」としてまとめた。

2 報告の内容と課題整理

本報告では、胎児と0～18才の子どもを対象として、放射線の健康影響や線量評価の科学的知見と防護体系を国際的コンセンサスに基づき、未解明または未成熟の課題を含めて記載した。さらに代表的異論も紹介した。その上で提言に向けた以下の課題整理を行った。

(1) 子どものリスク評価や防護の高度化とリスクコミュニケーションへの応用

子どもに特化した線量評価や影響評価研究の実施、ならびに放射線防護体系の構築や必要とされる人材の育成、国民のヘルスリテラシー向上を推進する必要がある。またリスクコミュニケーションに関する知識と技能の向上を目指すべきである。

(2) 医療倫理や小児患者と家族の心のケアに関する問題

個人の線量や影響に関する検査に当たっては、現場での丁寧な説明を徹底するとともに、「過剰診断」や「知らない権利への配慮」に関して医療倫理面からの議論を深めるべきである。「悪性ないし悪性疑い」と判定された患者や家族の気持ちに寄り添うスキルは、小児がんの診断と治療に関わる医療関係者から学ぶ必要がある。

(3) 原発事故後の甲状腺検査の在り方

今後の甲状腺超音波検査の在り方の検討には、検査の妥当性、丁寧な説明の方法、甲状腺がんの自然史や治療の在り等について、広く専門家による国際的な合意形成やガイドライン策定、そして関係者を入れた共通認識と協議の場が必要である。